



コラム

● 学会記 ●

QI 委員 産婦人科 片平 敦子

11/8,9 と山口県下関市で臨床細胞学会があり行ってきました。

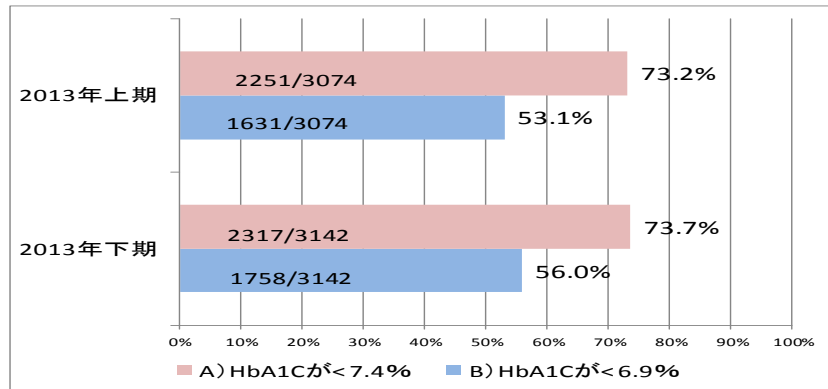
病理医をはじめ細胞検査士や婦人科医、内科医など多分野から大勢集まる学会です。東北大学では婦人科医は自分たちで組織標本を作り診断しており、細胞診専門医を取得する事もほぼ義務付けられていました。毎日毎日夢に出るまでプレバラートをみてゲロゲロになりながらようやく取得した専門医なのでそうそうなくすわけにはいかず、学会に出ることで得られる“ポイント”を get するために年 2 回参加するようにしています。

今年は下関ということで事前に下調べしようと思ったのですがあまりできず、ふぐ食べられればいいのかという軽い気持ちでいきました。学会員はタダで登れるという海峡ゆめタワーにのぼり“どっちが本土でどっちが九州？”から始まり、“巖流島ってここにあったんだー”と無知丸出しの感想を述べてきました。ちなみに巖流島は上から見たらすごく人工的な島で、実はいまは埋立地でできており昔の 1/5 くらいの大きさになってしまったのだそうです。本当は関門海峡を歩いて渡って見たかったのですが、天気も悪く、まあそんな時間もなかったのですが…

毎回この学会に行くメンバーは集まることになっており、近況報告で盛り上がります。先日大変な手術したとか、新しい薬使ったら副作用がでたとか、新しく発売された器具使ってみたとか、変な症例があったとか、プチ症例検討会並みで、学会より(?)勉強になったりします。

来年は島根県の松江です。今度は少し下調べをしていこうかと考えています。

指標紹介 糖尿病患者の血糖コントロール



糖尿病は慢性的に血糖値が高くなる病気で、進行すると多種多様な合併症を起こします。最近ではマスメディアでも多く取り上げられており、糖尿病について広く知られるようになりました。しかし、殆どの患者さんは自覚症状に乏しく、自身が疾病・治療と真剣に向き合うことが難しい病気です。そのため、糖尿病のことを理解してもらうための教育、食事療法、運動療法が治療の大前提です。近年、続々と新しいタイプの糖尿病治療薬が開発され、治療の選択肢は増えています。それでも単に薬を使えばよいというのではなく、食事・仕事などの生活スタイルはもとより、家族構成や性格といった個々の患者背景を視野に入れた包括的な治療を行うことが求められます。

HbA1c (ヘモグロビン エー ワン シー) とは、過去 1-2 ヶ月程度の血糖の高さを反映する検査です。測定の方法によって正常値は異なりますが、当院の採用している正常上限は 6.2% となっています(糖尿病の診断基準 HbA1c 6.5% 以上)。HbA1c が低い値にとどまっている患者さんの割合が多い=病院全体の血糖コントロールが良好、ということになります。ただ、軽症の患者さんが多い場合にも同様の結果が得られるため、重症の患者さんが集まる専門施設にとっては不利ということになります。そのため、他の施設との比較は慎重に行う必要があります。

QI 委員 糖代謝科 高橋 美琴

シリーズ“統計のはなし” No.17

シンプソンのパラドクス

先日、医療情報学連合大会に参加してきました。その中では特に「ビッグデータ」が盛んに取り上げられていました。テレビなどで皆さんも耳にしたことがあるのではないのでしょうか？

ところで、「ビッグデータ」とはなんでしょか？一部では、ボリューム (volume)、速度 (velocity)、バラエティ (variety)、という指針があるものの、その程度は曖昧です。これから有用性ととも定まってくることを期待しています。

さて、ビッグデータに関連して、ただ量がれば良いわけではない例を今回はお送りします。

とある大学での合格率を例とします。この例は「性別によって差別的な判定が行われていたのでは？」という疑いがかかった事例です。

下表を見ると、たしかに男性の方が 10% ほど合格率が高いです。

表 1. 男女別合格率

	出願者数	合格率
男性	8442	44%
女性	4321	35%

この詳細を見てみると、学部別に男女の合格率を調べたところ、多くの学部で女性の方が数%~十数%ほど合格率が高かったのです(学部ごとの詳細は割愛)。

このように、全体と学部別で結果が大きく反しているのはなぜでしょうか？下図を見て下さい。それぞれの円は学部ごとの志願者数の大小を表しています。左側が男性の、右側が女性の合格率です。この図を見ると、合格率が高い学部で男性の方がはるかに多く志願しています。一方、合格率の低い E 学部では、女性が多く志願しています。つまり、合格率が高い A、B 学部で男性の合格者「数」が大幅に多く、合格率が低い D、E 学部で女性の不合格者「数」が多かったため、全体で合算してみると男性の方が合格率が高くなったわけです。

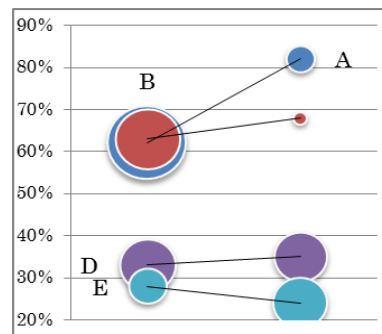


図 1. 学部別にみた男女の合格率 (左: 男性、右: 女性、円の大きさは志願者数)

このように、データを集めて単純に集計しただけでは、実情と全く異なる判断をしてしまう恐れがあります。量だけではなく、詳細な判断ができる「属性」も共に収集し、要因を深く探るようにしましょう。

医療情報企画センター SE 佐藤洋之

次号 (第 18 号・12 月発行予定) のご案内

次回は引き続き指標紹介

「紹介患者率・逆紹介患者率」

シリーズ“統計のはなし”

No.18 を予定しています。

